

道真竟宴詠懷人士考

キーワード…菅原道真、菅家文章・後集、竟宴、詠史、史記、漢書、後漢書

【要旨】父祖伝来の学問の家柄に生まれた菅原道真は、菅原氏の学問と学統をたえず継承牽引して後継伝授していく使命と気概を持った。しかも常にその力量と真価を問われつづける環境にあったことは天与の宿命であったともいえる。その感懷は折々に詠まれた諸々の詩篇にうかがい得るが、とりわけ学文講書・属文賦詩といった芸文に関わる詠作には、道真の心底に凝結する思いが濃淡をとりまぜて表出されていると考えられる。本論考の趣旨は、講書に加えて、「竟宴」（宮中で書物の講義や編集などが終わった後で催される宴会）の席において詠作された詩篇とそこに詠出された歴史人物等に着眼して、家学をにない教学・処世する道真の感懷を洗い出すことにある。

『史記』『漢書』『後漢書』という中国史書「三史」に関わる竟宴で作られた詠史の詩篇には、道真のライフステージに応じた感懷が、詠み得たその歴史上の人物を介して表出される。漢を再興した光武帝劉秀、漢の武帝の文章の臣たる司馬相如、代々の史家たる司馬遷、儒臣たる黄憲、叔孫通、公孫弘は、いずれもみな各時代の各分野でその歴史を代表する人物たちであり、その史伝を踏まえつつ詠み出される詩篇は、その個々人の事績を巧みに織り込みつつ、道真自身の感懷をも投射して詠唱されるから、単なる

堀 誠

詠史とは異なる面を有する。しかも竟宴の詩席にあつて詠み得た人物は、各自が引き得たもので、任意に選択したものではない。その偶然性の中で詠作された詩篇であるだけに、その人物の史伝を踏まえた感懷は臨機応変にして得意即妙的な一面をもあわせもとう。その詠作は史書類を継続的に講書あるいは講読し得た学問的成果の表出でもあるだけに、道真個人の詩才のみならず、往時の学問と詩宴の系譜を考える上でも妙味ある一連の作品であると考ええる。

一、

菅原道真は、三十三歳で文章博士に任ぜられ、宇多天皇の信任を得てやがて右大臣に昇進するも、左大臣藤原時平の讒訴によって太宰府権帥に左遷され、都に帰ることなく彼地で没する。時に五十九歳。その不運な最期はもとより、その出身が父祖伝来の学問の家柄であることはあらためて言うまでもない。その家柄のゆえに、菅原氏の学問と学統をたえず牽引継承して後継伝授していく使命と気概を持ちつづけ、その力量と真価を常に問われる環境にあつたことは天与の宿命であったともいえる。その感懷は折々に詠まれた諸々の詩篇にうかがえるが、とりわけ学文講書・属文賦詩といった芸文・教学に関わる詩篇には、道真の心底に凝結する思いが濃

淡をとりまげて表出されていると考えられる。

一例として、元慶三年（八七九）冬から同五年夏にかけて『後漢書』を講書した時期に詠作された『晋家文章』巻二所載の「講書之後、戲寄諸進士（講書の後、戯れに諸進士に寄す）」（82）を読みたい。

我是瑩瑩鄭益恩（我は是れ瑩瑩たる鄭益恩）

曾經折桂不窺園（曾經^{かつて} 桂を折り園を窺はず）

「鄭益恩」は、後漢末の学者として名高い鄭玄の子の名である。「瑩瑩（瑩瑩）」は、孤独で頼るところのないさま。『玉篇』には「瑩は、単なり。兄弟無きなり。」という。この詩句は、『後漢書』巻三十五の「鄭玄伝」に載る、鄭玄が子益恩を戒めた書の「家事の大小、汝一に之を承けよ。咨爾^{ああ}は瑩瑩たる一夫にして、曾て同生の相依る無し。（家事大小、汝一承之。咨爾瑩瑩一夫、曾無同生相依。）」の字句を踏まえることが明らかである。¹⁾

下句にいう「折桂」は、『晋書』「郗詵伝」に出現する。優秀な成績で官吏任用試験に合格したことを皇帝から問われた郗詵は、「猶ほ桂林の一枝・崑山の片玉のごとし。（猶桂林之一枝崑山之片玉。）」と答えたという。「折桂」は、その桂林の一枝を手折る意で、科擧など登用試験に及第することという語になっている。唐の李瀚の撰になる『蒙求』の標題に「郗詵一枝」のあることは周知のところであろう。さらに「不窺園」の語は、漢の景帝に召されて博士に任じた董仲舒が「帷を下して講誦」するあまり、「三年 園を窺はず。（三年不窺園）」との『漢書』「董仲舒伝」の記載に認められる。『蒙

求』には「董生下帷」の標題で行われる。

貞観十二年（八七〇）に方略試に及第し、元慶元年（八七七）には式部少輔に文章博士を兼ねるにいたった道真は、当時、三十代半ばの年齢に差し加つていた。是善の三男に生まれたという道真は、²⁾ 当時なお父は存命であつたものの、兄弟のいない孤特な存在となつていた。³⁾ こうした「我」の身の上を、道真自身が鄭玄の子たる鄭益恩に擬えた言説は、まさに鄭玄父子に関する史伝の載る『後漢書』を講書する環境の中で、相似た境遇にある人物に反応した即妙な着想であつたと考えられる。と同時に、この詩篇のあとに配される「博士難（古調）」（87）に、道真が文章博士に任じた時、「万人 皆競ひ賀びたれども、慈父 独り相驚」いて、「相驚くこと何の故ぞ」と問えば、

曰悲汝孤惻（曰く、「汝が孤惻なるを悲しむ」と）

と、父の危惧を回想的に詠出していたことと重なる。慈父は善の懸念は、鄭玄が益恩に宛てた戒言に認められる思いに相通じるところがあろう。また、漢の鏡歌に由来する樂府題の作である「有所思（思ふ所有り）」（98）にも、

内無兄弟可相語（内に兄弟の相語るべき無し）

の句が見えている。これら元慶年間の作に対して、寛平三年（八九二）に詠まれた「暮秋、送安鎮西赴任、各賦分字（暮秋、安鎮西の任に赴くを送る、各おの分字を賦す）」（350）の承句にも、

無兄無弟身初老（兄無く弟無く身初めて老ゆ）

と詠じている。すでに慈父是善は元慶四年（八八〇）八月三十日に逝き、いよいよ道真が菅家廊下を主宰して代々の学の重責をになうにいたっていたことは確かな事実である。

続いて自らの境遇を詠みはじめた道真は、領聯にいう。

文章暗被家風誘（文章 暗に家風に誘はる）

吏部儉因祖業存（吏部 儉に祖業の存するに因る）

文章博士に任ぜられたのも、父祖以来の家学の風に支えられたものにほかならず、式部少輔に除せられたのも、父祖の功業があったからこそであるとの感懷は偽りなきものである。吏部は式部省の唐名。道真が式部少輔に除せられたのは貞観十九年（八七七）正月十五日の除目であり、元慶改元後の同年十月に晴れて文章博士に任ぜられたのであった。¹⁾

かくて頸聯にはいう。

勸道諸生空赧面（道を勧めて 諸生空しく面を赧らめ）

従公万死欲銷魂（公に従ひて 万死 魂を銷さんと欲す）

「諸生」はこの『後漢書』の講書を受ける者たちを指す。「赧面」は、顔を赤らめ、恥ずかしがること。「勸道」は、道を勧める意。父祖の功業の余徳によって現在の地位にある道真が、『後漢書』を講読して伝来の学問を伝え、とりわけ「鄭玄伝」を講じて一子鄭益恩への「其れ勸めて君子の道を求め、研鑽して替はること勿く、

敬ひて威儀を慎み、以て有徳に近づけ。（其勸求君子之道、研鑽勿替、敬慎威儀、以近有徳。）をはじめとする訓戒を教え導けば、学問への真摯な厳しさに講書を受講する者たちは自らの姿勢の甘さに顔を赤らめるのであろう。²⁾「銷魂」は、魂を銷すほどに、覚悟を決めて万死を賭して尽力する意。「公」は公儀であり、また三公を指すのでもあろう。講書を受ける諸生たちに向けて、万死をかけて勉学すべきことを激励した「勸学」の言である。

同時に尾聯には家学の継承を念じて詠む。

小兒年四初知読（小兒 年四つ 初めて読むことを知る）

恐有疇官累末孫（恐らくは疇官の末孫に累ること有らん）

「小兒」とは、道真の長男高視を指す。「年四」「初知読」の字句は、貞観十八年（八七六）生まれの高視が四歳となり、ようやく読書できるようになったことをいう。「疇官」は代々に長く伝えられる官職。父祖伝来の官職が高視をはじめとする子孫末代にまで受け継がれることを念じてやまない道真でもある。

本詩篇は、「戯れに」とは題されるものの、道真の置かれた位置と環境が垣間見え、家学を継承する道真の得意の絶頂ともいえる時期の感懷のうかがえる好一篇といえる。この詩篇において、漢代に生きた鄭益恩が歴史人物として道真の感懷を彩り、その擬比の中に道真自らの心懷が象徴される。この『後漢書』の講書後の所詠に加えて、いわゆる「竟宴」の席において詠作された詩篇とそこに詠出された歴史人物等に着目して、家学をになう道真の感懷を洗い出したい。

二、

「竟宴」とは、我が国の平安時代、宮中で書物の講義や編集などが終わった後で催される宴会をいった。「竟」は、おわる・おえる意を表すことはいまでもない。⁶⁾道真の全詩篇の中で、詩題に「竟宴」の二字の認められるものは六作を数える。その中で詠作年代の最も古いものは「史記竟宴、詠史得司馬相如」(34)であり、貞観十年(八六八)の所詠といわれる。時に道真は二十四歳。一方、その最も新しいものは「北堂文選竟宴、各詠史、句、得乘月弄潺湲」(437)で、道真五十二歳の寛平六年(八九六)の詠作になる。いまこれらの詩篇の中で、歴史人士を詠出する諸篇に注目して論じたい。

その最初の詠作である「史記竟宴、詠史得司馬相如(史記竟宴、史を詠じて司馬相如を得たり)」(34)は五言律詩である。

犬子猶司馬(犬子は猶ほ司馬)
相如有旧聞(相如 旧聞有り)

詩題に確認される「司馬相如」に関しては、『史記』には卷一一七に「司馬相如列伝」が載る。その冒頭の一節に、「少き時より讀書を好み、撃剣を學ぶ。故に其の親之に名づけて曰く、「犬子」と。(少時好讀書、学撃剣、故其親名之曰「犬子。）」とある。「犬子猶司馬」は、幼名が「犬子」でありながら、その復姓の「司馬」が「馬を司る」意味を表すことを諧謔をこめていったものであろう。列伝によれば、「相如既に學んで、⁷⁾蘭相如の人と為りを

慕ひ、名を相如に更む。^{あつた}(相如既學、慕蘭相如之為人、更名相如。)」という。蘭相如は、戦国時代、趙に仕えた名臣の名。秦への使者となつて、持参した和氏の璧を秦の脅しにひるまず無事に持ち帰つて使命を果たしたという「完璧」の故事で名高い。その伝は、『史記』卷八十一の「廉頗藺相如列伝」に載るが、その史伝や相承に顕在化する蘭相如の人となりを慕つての改名の由来を詠じている。

官嫌為武騎(官は武騎為るを嫌ふ)
曲喜得文君(曲は文君を得るを喜ぶ)

「武騎」は、かつて司馬相如が楚の孝景帝に仕えて拝した「武騎常侍」の官職を指す。しかるに辞賦を好まぬ孝景帝のもとを病と称して去り、梁の孝王(景帝の弟)に仕えた。このころ詠作されたのが出世作となる「子虚賦」であつたことは周知のとおりである。

しかるに孝王が逝去したために、司馬相如は帰郷する。家は貧しく自らの生業も無く、臨邛令の王吉とともに訪ねたのが、当地臨邛の金満家である卓王孫の屋敷であつた。琴の名手でもあつた相如は、演奏を請われると、卓家には寡婦になつて間もない音曲好きな娘の文君のいることを承知の上で「琴心を以て之れに挑む」とは、『史記』「司馬相如列伝」に記されるところである。

この領聯において「官」の対語となる「曲」は、かくて相如が奏した音曲琴声の意にはかならない。その光景を戸から窺つて心に相如を悦び好いた文君は、ついに相如のもとに「奔」る。「奔」とは「私奔」すなわち駆け落ちの意である。かくて司馬相如は良家の卓文君を迎えたが、駆け落ち先の成都の新所帯は「徒に四壁立つの

み」と表現されるありさまであった。やがて臨邛に舞い戻った二人は酒舎を買い、文君は「鑑に當」たつて酒を売り、相如は犢鼻褌すがたで下働きの者といっしょに器を洗う。ついには卓王孫も折れて文君に僅百人、錢百萬、および婚嫁した時の衣服や財物を分与し、文君は相如と成都に帰って田宅を買って富人となる。詩句は「文君當鑑」に象徴される有情可憐な名高い故事を背後に控える。

苦諫長楊獵（苦に諫む 長楊の獵）

多勞広沢軍（多く勞る 広沢の軍）

この頸聯にいう「長楊」は、整厓にあつた離宮の名。「広沢」は、遊獵する土地を指す。両句はいずれも司馬相如の賦作品における所詠を踏まえる。

そもそもこの両句を理解するには、漢の武帝に召される契機となつた「子虚賦」をとらえなければならない。「子虚賦」は、かつて司馬相如が梁王のもとで著した作であつたが、その賦篇を善しと評價していた武帝は、「朕独り此の人と時を同じくするを得ざらんかな」と悔やむことしきりであつた。それを聞きつけた蜀の人で狗監を勤める楊得意が「臣の邑人の司馬相如自ら此の賦を為ると言ふ」と答えたことにより、司馬相如は武帝に召し出され、後に奏上した「天子遊獵賦」が御意にかなひ、晴れて郎に任ぜられた。その賦篇は、「楚 子虚をして齊に使せしむ。齊王ことごとく境内の士を發し、車騎の衆を備えて使とともに出でて田す。」に始まる。すなわち、楚王の使者子虚（この子虚し）の意を寓する）を迎えて、盛大に士を發し車騎の衆をそろえて狩りを催す齊王に対して、

子虚は楚王の狩りのもようを弁じると、この子虚と齊王の遣り取りを聞いた烏有先生（鳥んぞこのこと有らんや）の意を寓する）が齊のために楚を反駁し、同席した亡是公（是の公無し）の意を寓する）が、天子の上林苑の広大さを語るとともに、天子が奢侈を知覚して酒を解き獵を罷める大義を明らかにする。

この間、頸聯下句の「広沢」の語は、子虚に対する齊王の「楚も亦た平原広沢の游獵の地の饒かにして樂しきこと此くの若き者あるや。楚王の獵 寡人に何与ぞ」との問いかけの中に初出し、子虚が楚王の狩りの全容を語る中に、方九百里の雲夢の南に「平原広沢有り」と再出する。「広沢」は遊獵の地を象徴する語であるとともに、「軍」は田獵の意。天子の改悛を介して、その衆庶を顧みず国家の政を忘れた遊獵は否定しられ、山沢の民は慰勞安撫されるのであつた。

頸聯上句にいう「長楊獵」のことは、「司馬相如列伝」のもう少し後の部分に現れる。「天子遊獵の賦」によって郎に任ぜられた相如は西南夷の討伐に参画して功績を挙げるが、その後、賄賂を受けたとの上書で官を止めさせられるも、一年あまり後に再び召されて郎となる。しかし、卓文君との結婚により財力の豊かな相如は、公卿や国家の事に与ろうとせず、病身と称して閑居して官職を望まなかつたという。かつて主上に従ひ長楊宮に行つて狩獵をしたが、好んで熊や猪を撃ち野獸を追い回すので、上書して諫めると、主上はこの言を嘉納したと記載される。以上は『史記』『司馬相如列伝』の所伝に確認できる事績を踏まえる。

「司馬相如列伝」によれば、やがて孝文園（孝文帝の陵園）の令に任ぜられた司馬相如は、武帝が仙人の道を好むと知ると、列仙の

伝記によって、仙人たちは山沢に住んで姿はとても痩せているが、それは主上の念願する仙人ではないと考え、帝に約束していた「大人賦」を完成する。「世に大人ありて中州にあり、万里の住居はあれど、かつてしばらくも留まらず、世俗の窮屈を悲しみ、去って天空に昇り遠く遊ぶ」に始まる。賦中の「大人」の語は天子を指すという¹⁰。この賦のことは尾聯の二句に次のように詠まれる。

大人今可用（大人 今 用ゐるべし）

何処不凌雲（何れの処にか雲を凌がざらん）

尾聯上句の「大人」は、「大人賦」自体を指すよりは、その作者たる司馬相如を意味するものである。¹¹「司馬相如列伝」には「相如既に大人の頌を奏し、天子大いに説ぶ。飄飄として凌雲の氣有り、天地の間に遊ぶに似たり。（相如既奏大人之頌、天子大説。飄飄有凌雲之氣、似游天地之間意。）」ともあって、「大人」の語はもとより「凌雲」の語もここに典拠が確認される。かかる賦を詠作して天子の御意を満足せしめた相如の才は今また大いに用いられ、雲を凌がんにかりに重用されるべきことを頌えるといえよう。

以上を要するに、司馬相如は漢の武帝の文章の臣であり、いわゆる辞賦文学に欠くことのできない大家でもある。詠作の前年の貞観九年（八六七）に文章得業生に補せられた二十四歳の青年道真は、司馬相如に自らの進むべき将来の指針をも重ねて、その非凡の文才に追従すべく意気軒昂な処世の日々を送ったとも推測される。その希望あるいは願望をこの史伝中の人士に託して詠じたものとも考えられる。

因みに、司馬相如は文君との恋に始まる「文君當鐘」の話題をはじめ、多くの逸話の持ち主でもあるがために、時を経て詠まれた道真の他の詩篇にもその姿を現すことが少なくない。

第一に、不惑を過ぎて四十二歳の仁和二年（八八六）、讃岐守に任ぜられて三月下旬に着任した道真は、翌年秋に暇を乞うて都に帰り、自邸で年を越して讃岐に帰任する。その道中の詠作の一篇という「哭翰林學士（翰林學士を哭す）」¹²（246）の首聯に注目したい。

愁思病、甚馬相如（愁へて思へらくは病むこと甚しき馬相如）

別後三迴附起居（別れし後 三迴 起居に附せしを）

詩題にいう「翰林學士」は、文章博士の唐名。哀哭される文章博士の名は不詳。¹³首聯上句にいう「馬相如」は、司馬相如の復姓を略記して三字の表記にしたもの。「病むこと甚しき」とは、『史記』や『漢書』の「司馬相如伝」にある「相如口吃にして而して善く書を著す。常に消渴疾有り。（相如口吃而善著書。常有消渴疾。）」との記載に由来する。「消渴疾」とは、水を多飲して渴きを消さんとする病症に出た病名で、いわゆる糖尿病。その病いが司馬相如の痼疾となっていたことを史伝に確認できる。いまは亡き文章の才ある某翰林學士の病身を、消渴疾を病んだ文章の名家司馬相如に擬えて表現した詩句であった。¹⁴

第二に、同じく讃岐へ向かう道中の一篇である「小男阿視、留在東京。写送田大夫「禁中瞿麦花三十韻詩」云、「此詩也、応詔作之。時人重之。故奉之。」予吟之既之、不知其足。仍製一篇、統于詩草云爾（小男阿視、留りて東京に在り。田大夫の「禁中瞿麦花

三十韻詩」を写し送りて云はく、「此詩や、詔に応じて之を作れり。時人 之を重んぜり。故に之を奉る」と。予 之を吟じ之を翫びて、其の足ることを知らず。仍りて一篇を製りて、詩草に続くよぶと爾云ふ。」(302)の首聯にも、次の句作が見える。

家児不問老江漬（家児は江漬に老いたらんことを問はず）
只報相如遇好文（只だ相如の好文に遇へりしを報ず）

「家児」とは、詩題に「小男阿視」と称されるように、道真の長男高視を指す。この子息が、遠く讃岐の江海の地に客寓する父の老いつつある身の上を問うこともなく、詩題にいう「田大夫」と島田忠臣の「禁中瞿麦花三十韻」の作を書き写して送り知らせてきたことを詠む。「禁中瞿麦花三十韻」は島田忠臣が詠じた詩篇でありながら、その義父にして師たる島田忠臣を文章の名家たる司馬相如に擬え、その文名に違わぬよい作品を忠臣が作り得たことを表現したものであろう。

そして第三に、寛平二年（八九〇）に讃岐から秩満ちて帰郷したあとに詠作された「奉謝源納言移種家竹（源納言 家の竹を移し種うるに謝し奉る）」(329)の尾聯である。

詩題にいう「源納言」は源能有。この納言から道真の家園の竹を所望されて移し植えた後に詠まれた作であるが、竹は、晋の王徽之が「何ぞ一日として此の君無かるべけんや」といつて以来、「此の君」がその異名となる。まさに「此の君を吟嘯して口に喰ふことを棄つ」と詠み出した道真は、「豈に移し去りて朱欄に堪へんや」と源納言の館の朱欄にわが家の「此の君」が映えるかと氣遣う一方、

この竹の「空心」や「瘦幹」、そして今は虫喰いとなった「簡」や新たに截って作ることもかなわぬ「魚竿」への思いを詠むとともに、尾聯には梁の孝王と司馬相如の名がセットになって出現する。

梁王欲識孤貞節（梁王 孤の貞節を識らんと欲せば）
請喚相如雪裏看（請ふらくは相如を喚びて雪の裏に看しめんことを）

上句にいう「梁王」は梁の孝王であり、源納言を擬えていよう。孝王は前漢の孝文帝の子。下句の「相如」はもちろん司馬相如であり、道真自身をたとえるのであろう。

孝王は、梁に封ぜられて東苑を作る。方三百余里の広さがあり、これが「兔園」と呼ばれ、多くの竹を植え、中に修竹園のあったことが知られる。そもそも松竹は貞節・節操の堅いことをたとえる植物でもある。¹⁶「孤」は、そそりたつ孤竹の意味で、¹⁷孤竹君の子である伯夷・叔斉をも連想させる。「貞節」は、移植される「此の竹」のもつ貞節な心であらうし、延いてはその旧主人たる道真の赤心をもいう。加えて、下句の「雪裏看」の文字によれば、この尾聯両句が「文選」卷十三「物色」に載る謝靈運の「雪賦」を踏まえることが知られる。

年末の日暮れがたに寒風が吹きつり愁雲が垂れこめる中、心中不興の梁王は兔園に遊び、旨酒を用意して鄒陽、枚乗を招く。司馬相如が最後に到着すると、空模様は「俄かにして微霰零り、密雪下る」と変じ、ここに『詩経』の「北風」（邶風）と「（信）南山」（小雅）を歌った梁王は、相如に簡を授けて、「子の秘思を抽き、子の妍辞

を聘せ、色を倅^{ひと}しうして称を揣^{はか}り、寡人の為に之れを賦せよ」と下命する。司馬相如は立ち上がって揖し、「臣聞く」と詠じはじめ、「霜雪の交はり積もれるを踐み、枝葉の相違へるを憐れむ。遙かなる思ひを千里に馳せ、手を接へて共に帰らんことを願ふ」とまとめあげれば、鄒陽は心服して「積雪の歌」と「白雪の歌」とを続け、枚乗は吟翫扼腕する梁王に「乱」を作れと命じられて、白羽は白いけれども質は軽く、白玉は白いけれども空しく貞を守るだけで、雪が「時に因りて興滅す」るのに及びもつかず、「玄陰（冬の気）凝るも其の潔を昧^{くら}くせず、太陽曜^{かがや}くも其の節を固くせず」とその融通無碍なるさまはもとより、雲や風のままに従い、物や地によって形を変え、遇うものによって白くもなれば染めるがままに汚れることを唱い、心を浩然の氣の中に闊達にする自由さを説いて結ぶ。

道真はここに史伝のみならず謝靈運の「雪賦」に詠唱された世界をも駆使し、この往昔は中国の「雪賦」のごとく、源納言が文章の臣たる道真を招き喚んで詠作させ、そこに詠出された雪のうちに貞節の心を試しみよと詠じたのである。竹とのゆかりの深い梁王と文章の臣たる司馬相如を詠唱に組み入れて、自らの思いを託した道真の詠作と見ることができる。

道真の中において、司馬相如の存在は、「史記竟宴、詠史得司馬相如」の詠作以来、大きなものであり、日本の文章の臣として複数の詩篇に異土の先人を投影し、その事績を巧みに借り用いて自己を表出していたことが明らかである。

三、

道真が詠み得た「竟宴」詩の二番目に当たるのは、「漢書竟宴、詠史得司馬遷（漢書竟宴、史を詠じて司馬遷を得たり）」（63）である。貞観十三年（八七二）三月に少内記に任じた道真は、『漢書』を門人に講じ、その「竟宴」で詠作したのが本作である。¹⁸ここに道真が詠じることとなった司馬遷は、中国の正史の最初となる『史記』を撰述したことで知られる。その原動力となったのは、力戦空しく匈奴に投降することになった李陵を弁護したことにもなう宮刑の恥辱であったともいう。『史記』『太史公自序』には、代々の「太史」としての職務への強い意志と責任がただよう。その司馬遷を竟宴で詠ずることとなった道真は、まずその修養と職分に着眼する。

少日纔知誦古文（少^{わか}かりし日 纔に古文を誦するを知れり）
何図祖業得相分（何ぞ図らん 祖業の相分かるるを得ること
を）

「誦古文」の文字は、もちろん『漢書』『司馬遷伝』にいう「遷龍門に生まれ、河山の陽に耕牧す。年十歳にして、則ち古文を誦す。（遷生龍門、耕牧河山之陽。年十歳、則誦古文。）」との生い立ちを記した部分に確認されるが、元来、その記述は司馬遷自ら『史記』『太史公自序』に記した文言に依ることが明白である。「古文」は、漢代の隸書体を「今文」というのに対して、秦以前に用いられた文字をいう。「少日」とは、『史記』『漢書』の記載に認められる「歳

十歳」のころを指すのであろう。学問にいそしみ、二十歳で南は長江・淮水に遊び、会稽山に上り、禹穴を探り、九疑山を窺い、沅水・湘水に浮かび、北は汝水・泗水を渉り、齊・魯の都に学問し、孔夫子の遺風を觀て、鄒・嶧で郷射(周代、地方から天子に人材を推薦するに際して、民意を徴すべく射術を行わせる儀式)を行い、蕃・薛・彭城では困苦し、梁・楚に立ち寄って帰着した。かくて仕えて郎中に任ぜられ、使命を西に奉じて巴・蜀以南の地に遠征し、邛・笮・昆明を攻略して、帰還して復命した。

その司馬遷にとって「祖業」とは何か。「祖業」の語は、すでに読んだ道真の「講書之後、戲寄諸進士(講書の後、戯れに諸進士に寄す)」(82)の頷聯にある、

吏部偷因祖業存(吏部偷に祖業の存するに因る)

の句中にも用いられていた。道真は若くして菅家の将来をにない、確かに「祖業」への強い意識を持っていたことが明白である。⁽¹⁹⁾この「祖業」の語を異国の先人たる司馬遷に翻って考究すると、司馬遷が帰還した時、父の司馬談は太史公に任ぜられていながら天子の泰山封禪に用いられず、失意にあつて死ななばかりであったという。その父は、使いから帰った司馬遷と対面して、「予の先、周室の太史なり。」と語りはじめ、やがて「汝復た太史と為り、則ち吾が祖を続け(汝復た太史、則続吾祖矣。)、また「予死するや、爾必ず太史と為らん。太史と為りて、吾が欲する所の論著を忘るる母かれ。」と遺命する。

「祖業」とは、先祖代々が継いできた「太史」の役務をいう。司

馬遷はこの天文曆算をつかさどり国家の歴史をつかさどる「祖業」を後継し、父の無念を晴らして遺命された「論著」の大任を全うすべく意図してやまなかった。道真は、「祖業」の語を介して、同じく代々の業を継ぐ者として同様の境遇にあった司馬遷に自らを重ねていたにちがひなく、司馬遷への憧憬もまた浅からざるものがあつたとも思われる。

毎思劉向称良史(毎に思ふ 劉向 良史と称するを)
再拜龍門一片雲(再び拜す 龍門 一片の雲)

「良史」の語は、『漢書』『司馬遷伝』『賛』にある「劉向、揚雄博く羣書を極めし自り、皆遷に良史の材有りと称す。(自劉向、揚雄博極羣書、皆称遷有良史之材。)」に認められるものである。司馬遷が優れた史官としての才能をもつことを称えている。「劉向」は、前漢末の学者で、漢室の子孫でもあり、秦の始皇帝の焚書によって混乱をきたした宮中の図書を整理校訂する作業を推進し、目錄解題を作成したことで知られる。また「賛」にこの劉向と並称された「揚雄」もまた後漢末の学者にして文章家として知られる。

この転句には、劉向が司馬遷を「良史」であると称賛したことを詠じるが、道真はたえずその司馬遷の偉業を思い慕わずにはおれない。「龍門」は、すでに引用した「太史公自序」あるいは「司馬遷伝」に認め得る出身地の地名(現在の陝西省韓城市。古の禹がうがった地と伝えられる)にはかならない。道真は、この龍門にかかる一片の雲を再拜してやまぬとの思いを詠いあげて結ぶ。

いわゆる「三史」「文選」と称されて学問の基盤に置かれる漢籍

の中で、正史の祖たる『史記』を撰じ、かつ「太史公自序」を書き、『漢書』に史伝の載る司馬遷の存在は、学文を修養し講述するものにとつてはとりわけ大きく、崇敬すべき対象にほかならない。まして祖業としての文章道を継ぐべき道真であれば、祖業を継いで往古からの歴史を書記した「良史」司馬遷に対する敬慕の念は一方ならず、その切なる思いを尾聯の文辞に端的に表出していたといふことができる。

四、

「後漢書竟宴、各詠史、得光武（後漢書竟宴、各^おの史を詠ず、光武を得たり）」（91）は、道真が元慶五年（八八一）夏に『後漢書』を講じ終わり、翌六年春に開かれた竟宴での詠作である。道真三十七歳。

この『後漢書』の講書は、貞観十四年（八七二）秋、文章博士の巨勢文雄が講じ始めたものであったが、元慶元年（八七七）春に文雄が左少弁に転任して中断した。その後、元慶三年（八七九）冬から道真によって続講されるところとなったとの経緯があった。²⁰この竟宴で道真は、詩題にあるように、「光武」すなわち光武帝の題を得て詠じる。

時龍何处在（時龍 何れの処にか在る）

光武一朝乗（光武 一朝 乗ず）

「時龍」の語は、『後漢書』「光武帝紀」の「論」にいう「何を以

て能く時龍に乗りて、天を御せんや。（何以能乗時龍、而御天哉。）」の中に見えている。その注には、「易に曰く、「時に六龍に乗りて、以て天を御す」と。（易曰、「時乗六龍、以御天。」）とあるが、「時龍」はたえずどこにでも存在するものではなく、それに乗ずるタイミングを逸することがあつてはならないものである。漢の天下を再興する光武帝はそのチャンス逃さず、その「時龍」に乗じたことを詠じる。

済県低飛鳳（済県 低く鳳を飛ばしめ）

曄沱暗合水（曄沱 暗に水を合す）

領聯では、出生に際しての瑞兆にあわせて、後漢の再興に際しての奇跡を詠じる。「済県」は光武帝の誕生の地をいう。河南省陳留の済陽。『後漢書』「光武帝紀」の「論」に、光武帝は建平元年（前六）十二月甲子の夜、済陽令であつた父の任地の県舎で誕生したと記す。出生に際しては「赤光の室中を照らす有り。（有赤光照室中。）」との記載がある。「鳳」が低く飛ぶとは、偉人聖人が出生出現する瑞祥である。「曄沱」は、河の名。『後漢書』「光武帝紀」に、かつて王郎に追われた破虜大將軍（光武帝）が、曄沱にいたるも船はなく危難この上ない時、氷が対岸まではり合わさり、難なく曄沱河を渡り得たとの奇跡を詠じた句である。

將軍星有列（將軍 星のごとくに列なる有り）

曆数火相承（曆数 火 相承く）

登極前の光武帝は、太常偏將軍、のちには破虜大將軍に任ぜられて、自ら將軍として戰場に立ち、小敵を見ては怯えながらも大敵を見ては勇猛果敢に戦うと不思議がられたとも伝える。頸聯上句は、その武勇と人望に惹かれ、きら星のごとくに付き従った「將軍」たちの少なからざることを唱おう。「曆数」は、運数、運命をいう。『後漢書』『光武帝紀』の「論」には、すでに記したように、降誕の日、畎舎では赤光が部屋中を照らしたという。いわゆる皇帝の異常出生説話⁽²⁾にほかならず、これを異として卜者の王長に占わせたところ、王長は左右のものを召し寄せて、「此の兆は吉なること言ふべからず。(此兆吉不可言。)」と伝えたと記す。「赤光」は火徳を表し、漢の皇統を継承することを意味する。この年は、済陽の県界に一茎九穗の嘉禾が生じたので、その祥瑞に因んで「秀」と命名したことも知られる。

計会天人応 (計会 天と人と応ず)

宜哉得中興 (宜なるかな 中興を得ること)

『後漢書』『光武帝紀』によれば、建武元年(二五)夏四月、南のかた平棘の地(河北省趙県の南)で臣下たちから即位するよう請われた劉秀が「寇賊未だ平げず、四面 敵を受く。(寇賊未平、四面受敵。)」と辞譲するや、耿純が進み出て即位を促し、積年の思いを表明する。その記事冒頭の「其の計、固より其の龍鱗を攀ぢ鳳翼に附し、以て其の志す所を成さんことを望むのみ。今 功業即ち定まり、天人も亦た応ず。(其計固望其攀龍鱗附鳳翼、以成其所志耳。今功業即定、天人亦応。)」との言辞に、この尾聯の「計会天人応」

の句は依るものであろう。「龍鱗に攀ぢ、鳳翼に附」いて劉秀という傑物のもとで天下再興の志計を成就せんと大同一致する。「計会」の語に加えて、「天人応」は、いわゆる天人相関の考えに基づく。英傑たる劉秀の功業も確固たるものとなって、即位への天と人との意志が相応じたことを詠う。

かくて耿純がいう「時は留むるべらず、衆には逆らうべからず。(時不可留、衆不可逆。)」との誠切な言辞に深く感じ、劉秀は「吾將に之を思はんとす。(吾將思之。)」と答える。しかも鄙に進軍すれば、彊華が関中から奉呈した「赤伏符」には、「劉秀 兵を發して不道を捕らへ、四夷 雲集して龍は野に鬪ひ、四七の際 火は主と為らん。(劉秀發兵捕不道、四夷雲集龍鬪野、四七之際火為主。)」の文言があった。ここに火徳の王朝を継承するという正統な意味が認められるが、かくて臣下たちに推されて、劉秀は六月己未の日、皇帝の位に即く。

「中興」とは、一度衰え退いたものが中ごろで再び盛んになることをいう。『後漢書』『光武帝紀』には、中元元年(五六)の夏、京師では醴泉が涌出し、これを飲んだ者の疾病が癒える等々の祥瑞が重なった。かくて光武帝は「中興」を称せよと進言されながら、これを納れず、「無徳」と自ら謙譲したと伝えている。ここに「中興」の語が出るとともに、即位した光武帝は翌中元二年(五七)二月戊戌の日、南宮の前殿に崩御する。年六十二。

光武帝は遺詔して無益な葬礼をとどめるとともに、帝位は第四子の莊(明帝)が継ぐ。『後漢書』『明帝紀』には、同年夏四月丙辰の日、詔して「予は末小の子にして、聖業を奉承し、夙夜 震畏し、敢えて荒寧せず。」と述べるとともに、「先帝は命を受けて中興し、

徳は帝王に倅しく、萬邦を協和し、上下を仮りて、百神を懷柔し、鰥寡を恵す。」と亡き光武帝を讃える中に「中興」の語が出現する。結びの句作においては、まさに光武帝自身は固く受け入れなかった「中興」の語をもって偉業を成し遂げ得たことを顕彰することが明らかである。「宜哉」とあるように、光武帝の足跡を肯定して称揚する道真である。因みに、この「中興」ならびに光武帝に関しては、後述するように、道真の詩篇にあつては貞観六年に溯つて詩の序文に詠じられていたことが知られる。

五、

貞観六年（八六四）に詠まれた「八月十五夜、嚴閣尚書、授後漢書畢。各詠史、得黃憲。并序。（八月十五夜、嚴閣尚書、後漢書を授くること畢る。各おの史を詠じて、黃憲を得たり。序并せたり）」（9）には、いわゆる「三史」に司馬遷や光武帝らを加えて、これから学問に関する弱冠二十歳の道真の識見をうかがうことができる。

詩題にいう「嚴閣尚書」は、父の是善を指す。「嚴閣」の意は嚴父に等しく、「尚書」は「刑部尚書」の意である。この貞観六年（八六四）三月、是善は刑部卿に任じたのであつた。是善は『後漢書』の講書を終わり、この仲秋の夜、宴を催し、各人が史を詠じて、道真は「黃憲」を詩題に得る。その序は簡要をつくした内容をもつが、長文にもわたるので大要を記せば、天子のそばに仕える「日官」（史官）の「事を記し群を籠む」る役務を記すとともに、「尚書」、「春秋」に次いで、司馬遷は『史記』を撰して帝王の挙を余さず遺し、後漢の班固は『漢書』を著し国家を修める大業が建つたと述

べるとともに、洛陽（事実は長安）の帝都で暫く劉嬰が前漢最後の天子に立ち、やがて建武元年（二五）、すでに引用もしたように、光武帝は部下からの度重なる要請によって即位を決意するが、それに先んじて緑林軍によつた更始將軍劉玄（光武帝の族兄）が前漢の宗室に当たることから即位して更始（二三〜二五）に改元したが、それを「春秋を偷む」と記す。かくて即位を受け入れた光武帝は、「徳を火方に垂れ」「我が社稷を安んぜし者」であればこそ、「光武中興の主」であるにはかならない。そして二代顯宗は遺業を継いで永平の政と讃えられたが、肅宗の孫の恭宗孝安皇帝が繼ぐや亡国への坂道を転がり、桓帝・靈帝は弊害をなして、かくて漢の治世の四百年はその歴史の筆を献帝（孝献皇帝）に絶ち、礼楽は山陽公（献帝）が魏の曹丕に譲位してついでなる結果となつた。その歴史的帰結は、諸葛孔明をして、「小人に親しみ、賢士を遠ざくるは此れ後漢の傾頽する所以なり」と評せしめたところであつたという。

わずかな文字で前漢・後漢を大観すると同時に、道真はこの後漢の歴史は、劉宋の范曄が紀伝して、唐の太子李賢が注解を試み、百代の後世まで知られる環境が整えられ、嚴父是善は『後漢書』が「直筆」の優れた史書たることを認識して、芸閣（蔵書館）に校定し講書した。かくて貞観六年八月十五日、「赤帝の史」を受講した者が秋涼満月の時節に遊宴して、史を分かちて風流を詠ずるにいたる経緯を記す。

以上の序には道真の学識に裏付けされた字句が生起する。この竟宴で道真は「黃憲」を得て詠歌する。

ここに詠ぜられる黃憲は、『世說新語』『德行』篇に「顔子復た生ず。（顔子復生。）」、すなわち顔回の再来とまで絶賛されたことの

知られる人物であった。⁽²³⁾汝南の慎陽の人で、字は叔度。代々貧賤で、父は牛医であったと『後漢書』卷八十三所載の「黄憲伝」に見える。

黄生未免在人間（黄生 免れず 人間に在ることを）

千頃汪汪一水閑（千頃 汪汪として一水閑なり）

「黄生」は、黄憲をいう。首聯の上句は、「人間」に住み暮らした生涯を詠唱する。「黄憲伝」によれば、若いころ汝南郡に遊学して黄憲に随従した郭泰（字は林宗）は、日を累ねてようやく還り、黄憲の人物像を問われるや、「叔度 汪汪として千頃の陂の若し。之を澄ませども清まず、之を淆^{けが}せども濁らず。量るべからざるなり。（叔度 汪、汪、若千頃、陂、澄之不^{けが}清、淆之不^{けが}濁、不可量也。）」と評したという。首聯下句はこの字句を踏まえる。黄憲の度量が並々ならず、その閑かに構えた人柄を詠む。

逆旅初知師表相（逆旅 初めて知る 師表の相）

高才更見礼容顔（高才 更めて見る 礼容の顔）

領聯上句もまた「黄憲伝」に、潁川の荀淑が慎陽の逆旅^{やど}で黄憲に遇った時、年十四の黄憲と話してその異質を見抜き、日移すも立ち去れず、「子、吾が師表なり。（子、吾之師表也。）」といったと記載するのに依る。「師表」は、手本、模範の意。下句も「黄憲伝」に、「同郡の戴良、才高くして倨傲なりしも、而るに憲に見えて未だ嘗て容を正さずんばあらず。帰るに及びては、罔然として失ふこと有るが若きなり。（同郡戴良、才高倨傲、而見憲未嘗不

正容。及帰、罔然若有失也。）」と記すのに依る。詩句の「高才」は、戴良の人と為りをいった「才高倨傲」を踏まえ、「礼容の顔」とは、「未嘗不正容（未だ嘗て容を正さずんばあらず）」と記された黄憲の容顔をいおう。

陳蕃印綬慙先佩（陳蕃が印綬 先づ佩びむことを慙づ）

郭泰車鑾歎早還（郭泰が車鑾 早く還らむことを歎ず）

頸聯上句には、のちに三公となつて印綬を帯びることになった陳蕃が朝儀に臨んで「叔度 若し在らば、吾 敢へて先んじて印綬を佩びず。（叔度 若在、吾不敢先佩印綬。）」と歎じたこと、下句は首聯下句に関連するもので、汝南に遊学した郭泰が、まずは袁閭を訪ねては宿^{しゆく}することなく退いたが、黄憲に随従しては「日を累ねて方に還（累日方還）」ったこと、いずれも「黄憲伝」の記載に基づいて詠むところである。

僅就京師公府辟（僅に京師 公府の辟に就きしのみ）

徵君豈出白雲山（徵君 豈に白雲山より出でめや）

尾聯は「黄憲伝」の末尾の記載に依る。初め孝廉に挙げられて、公府に召辟された黄憲は、友人に仕官を勧められて拒むところはなかったが、果たして京師（洛陽）に到るやそのまま帰還して、結局は官途に就くことはなく四十八歳でその生涯を終わつた。上句はこの記載を踏まえ、下句にいう「徵君」は、「天下号して「徵君」と曰ふ。（天下号曰「徵君」。）」との「黄憲伝」の結びの字句による。

「徵君」は、朝廷から徵^{めい}されながら官に就かなかった者の意。「白雲山」は、崑崙山の西王母が周の穆王のために謡ったという「白雲謡」に因んで、仙郷、天帝の居所を「白雲郷」というのによるか。「人間」という「白雲山」に在って出る^{いず}ことなき黄憲、その地仙のごとき高潔清廉な生きざまを頌美する句作であろう。

顔回の再来とも称されて才徳深く廉潔を貫き、人々から畏服された黄憲を、『後漢書』所載の「黄憲伝」の短い篇簡に認められる遺事を各句に抄出鏤刻する。そこに描出された黄憲像には学問する者としての清貧な黄憲の境涯に対する共感を讀みとることができる。

この竟宴詩の序には、「蓋し仲尼閑居せり、曾子侍坐す。道を思ふの事 古自り存す。」と『孝経』『開宗明義章』を踏まえた教学の旧例を記し、またこの『後漢書』の講筵に「書淫」と号された皇甫謐や「伝癖（左伝の癖）」のある杜預のごとき好学の人士たちが集まったことをも述べる。かくて講書を終えた是善は、この貞観六年（八六四）三月に刑部卿に任じていたが、道真は、無官にして「師表」の存在たる黄憲に父是善を重ねて、その学問を讀めるがごとくに詠じたとも見られる。

六、

「勸学院、漢書竟宴。詠史得叔孫通（勸学院、漢書竟宴、史を詠じて叔孫通を得たり）」（145）は、元慶八年（八八四）、道真四十歳の詠作である。叔孫通は、秦の二世皇帝の時に博士となったが、秦末の動乱の中で項梁・項羽に従属して保身をはかり、さらに漢の高祖劉邦に仕えて博士となった儒者である。

游魚得水幾波濤（游魚 水を得たり 幾ばくの波濤）
命矣孫通遇漢高（命なるかな 孫通の漢高に遇ひしこと）

いわゆる「水魚の交わり」は、水と魚が密接不利の關係にあるように、極めて親密な交流をいう。「君臣水魚」の語もあるように、三国時代における蜀の劉備とその臣下となった諸葛亮との君臣關係に擬えるもので、『三国志』『蜀志』『諸葛亮伝』に見える「孤の孔明有るは、猶ほ魚の水有るがごとし。（孤之有孔明、猶魚之有水。）」との劉備の言に由来した語にほかならない。首聯の上句はその君臣關係をとらえ、幾つもの波濤を乗り越えて、叔孫通が漢の高祖劉邦と巡り合った運命を詠じる。

暗記龍顏奇在骨（暗に記す 龍顏の奇なること骨に在るを）
先知虎口利如刀（先ず知る 虎口の利きこと刀の如きを）

「龍顏」の語は、『史記』『高祖本紀』の「高祖の人と為り、隆準にして龍顏なり。（高祖為人、隆準而龍顏。）」の記載に認められることは周知の通りである。天下を取る劉邦の異相として記載されるものにほかならない。下句も、『漢書』卷四十三所載の「叔孫通伝」に依る。二世皇帝の下問に阿諛の言をもって巧みに答え、帛二十疋、衣一襲を賜って博士に拜せられた。宿舎に戻った叔孫通に対して、諸生が「生 何ぞ言の諛なりしや。（生何言之諛也。）」と難詰するや、叔孫通は「公知らず、幾んど虎口を免れざるを。（公不知、幾不免虎口。）」と答える。下句は秦に在る危険を察知したことを詠じたものである。

諛言不謝加新印（諛言 謝せず 新印を加ふるを）
降見無嫌變旧袍（降見 嫌ふこと無し 旧袍を變へるを）

上句にいう「諛言」の「諛」字は、先の諸生の発した「生何言之諛也」との言の中に認められる。叔孫通はその場逃れの阿諛便佞の言動をもって博士に拝せられて印綬を受けるも、謝意を表すことなくすぐさま秦の虎口を脱して郷里の薛（山東省滕県）に逃げた。薛の地は楚に降っていたため、項梁と項羽とに従事するが、漢の二年、漢王（劉邦）が彭城に入ると、叔孫通は漢王に降る。ここに漢王は叔孫通を引見するが、その儒服姿が気に入らず、かくて叔孫通は服を楚製の短衣に変えるのを厭わなかった。漢王もそれを喜んだと記す「叔孫通伝」の記載に下句は依っている。

太史公雖称大直（太史公 大直と称すと雖も）

猶慙去就甚鴻毛（猶ほ慙づらくは 去就の鴻毛より甚だしきを）

太史公（司馬遷）が叔孫通を「大直」と賞賛したことは、実は『漢書』「叔孫通伝」には見えない。『史記』巻九十九の「叔孫通伝」における「太史公曰」の結びに、「大直は拙^{ちつ}するが若く、道は固より委蛇^{ゐだ}たり。（大直若拙、道固委蛇。）」とある中に認められる。

司馬遷は、時務を度り^{はか}り礼法を制し、出処進退を時勢に合わせて漢の儒宗となった叔孫通の生き方を肯定して評するが、道真はその進退去就の鴻毛より甚だしく軽いことを慙^いする。不惑の道真にとつて、学文に信を置く以上はあだや疎かにできぬ所行とも見られたか

と推測される。その処世の信念は異なれども、待望されるのは一つに水を得た魚となり得る時世の到来でもあったろうか。「慙」字の裏に、確たる自負さえうかがえる。

七、

寛平五年（八九三）十一月ごろに詠まれた「文章院、漢書竟宴、各詠史、得公孫弘（文章院、漢書竟宴、各おの史を詠じて、公孫弘を得たり）」（372）は、『漢書』の竟宴の詠史としては、元慶八年（八八四）の「勸学院、漢書竟宴。詠史得叔孫通」（145）から九年を隔てた詩篇である。²⁴ 道真四十九歳。詩題にいう「文章院」は、中国留学から帰朝した祖父清公が大江音人と公許を得て設立した文章院東西両曹をいう。

道真は、この寛平五年の二月十六日に参議に任じて式部大輔を兼ね、同二十二日には左大弁に転じ、その後、勘解由長官、春宮亮を兼ね、宇多天皇のもとで榮進の道を歩む。この竟宴詩はその上昇期の詠作でもある。

詠史の対象となった「公孫弘」は、前漢の晩学の士として知られる。『漢書』巻「公孫弘卜式兒寛伝」の「公孫弘伝」によれば、菑川国の薛の人で、若いころに獄吏となったが、罪を得て免職となり、家貧しく海辺で養豚を生業としたが、四十余歳で『春秋』の経説と雑家の説を学んだと伝えられる人である。

六十初徴八十終（六十にして初めて徴され八十にして終ふ）
官班博士遂三公（官班は博士より遂に三公たり）

「公孫弘伝」によれば、武帝は即位後すぐに賢良・文学の科の人士を招き、六十歳の公孫弘が賢良科で京師に召されて博士となり、のちに丞相・御史の地位に在ること六年、八十歳で丞相の職に在るまま世を去つたと伝えられている。「官班」は、官職の順位をいう。「三公」は、前漢では丞相（大司徒）・太尉（大司馬）・御史大夫（大司空）。晩年に出仕しての榮達が詠じられる。

太常対策科為一（太常の対策 科は一と為す）
丞相招賢閣在東（丞相 賢を招き 閣は東に在り）

そもそも初めて仕官した公孫弘は匈奴に使用したが、その復命が武帝の意向に副わずに無能とされ、病と称して官をやめて帰国した。後、元光五年（前一三〇）にまた賢良・文学科の人材を徴するに際して、公孫弘は辞退したものの菑川国は強くその人材を推した。領聯上句は、かくて臨んだ「太常の対策」において、公孫弘の成績を下位に判定して奏上したものの、武帝は自ら「科為一」、すなわち対策を第一等に拔擢して、引見の上、相貌がはなはだ麗しい公孫弘を博士に任じた。領聯下句は、やがて丞相となった公孫弘が、こうして自分自身が引き上げられたことを思い、賢者を招く策を講じたことを詠じる。まさに「公孫弘伝」に、「徒歩より起こり、数年にして宰相に至り候（平津侯）に封ぜられ、是に於いて客館を起て、東閣（東向きの小門）を開きて、以て賢人を延き、与に謀議に参ぜしむ。（起徒歩、数年至宰相封侯、於是起客館、開東閣、以延賢人、与参謀議。）」と伝える事績を踏まえていよう。

何忌牧童疲望海（何ぞ忌まん 牧童の疲れて海を望まんことを）

不愁布被耐寒風（愁へず 布被の寒風に耐ふることを）

こうして立身を極めた公孫弘ではあるが、その昔は「家貧しくして、豕を海上に牧す（家貧、牧豕海上）」る身の上であった。疲れ果てても日々の辛さを厭うことなく前向きに生きて、やがて公孫弘は御史大夫に選任される。公孫弘は汲黯によって、「弘は位三公に在りて、奉禄甚だ多きも、然るに布の被を為る。此れ詐りなり。（弘位在三公、奉禄甚多、然為布被、此詐也。）」と武帝に暴露されるが、公孫弘は「誠に弘の病に中る。」と武帝に答えたことが知られる。まさに布の布団で寒風をしのご生活を愁えることなく、往時さながらの生活ぶりであったことが詠われる。

後生欲識才名貴（後生 才名の貴きことを識らんと欲せば）
請見孫公我道通（請ふ見よ 孫公 我が道に通じたらむことを）

「後生畏るべし」とは『論語』『子罕篇』に出典する語であったが、その将来を囑望される氣力盛んな後進たちが公孫弘の才能の誉れ高き所以を明らかにすれば、それはどこに認め得るであろうか。「公孫弘伝」によれば、淮南・衡山の二王の謀反に際して骸骨を乞うた上奏文に、「通道」の語がある。

臣聞くならく、天下の通道 五つあり、之を行ふ所以の者は

三つあり。君臣、父子、夫婦、長幼、朋友の交わりの五つなる者は、天下の通道なり。仁、知、勇の三つの者は、之を行ふ所以なり。

（臣聞天下通道五、所以行之者三。君臣、父子、夫婦、長幼、朋友之交、五者天下之通道也。仁、知、勇三者、所以行之也。）

「通道」とは、天下に通じて行われる普遍的な道理、達道をいう。その通道を実現する三つの所以に関しては、「故に曰く、「問ふを好むは知に近く、行ふを力^{つと}むるは仁に近く、恥を知るは勇に近し。此の三者を知るは、自ら治むる所以を知り、自ら治むる所以を知りて、然る後に人を治むる所以を知る」と。（故曰、「好問近乎知、力行近乎仁、知恥近乎勇。知此三者、知所以自治、知所以自治、然後知所以治人。」）とも説く。これを踏まえて公孫弘は、自らを治め得ずして、人を治め得ざる道理をとき、かつ武帝が仁の根本たる孝弟の道を行い、周のごとき治道を建て、文王・武王の人徳を兼ね備え、四方の人材を招いて賢者を任用して、百姓を督励し賢材を勧奨することを論説している。

公孫弘がいう「通道」が我が道に通ずることをご覧あれとは、公孫弘の治道の理念に対する道真の共感と共有性をも意味しよう。末句における「道通」の措辞は句末に必須な押韻にあわせて「通道」の文字を捻ったものでもあろう。

詠作の翌年には、道真は遣唐使の大使に任ぜられながら派遣の検討を建議して、ついに遣唐使が停止されたことは歴史的な記憶に残るものである。その前夜の信任と榮進の中にあつて、公孫弘とは生い立ちを異にした道真ではあるが、自らも後生の一人とし

て公孫弘の才名を重んずると同時に、道真自身の治道の才名が公孫弘と引き比べられる。そこには自ら進む道に対する知命を控えた道真の自信のほどもうかがえよう。

八、

講書や竟宴に際して詠じられた道真の詩篇を読んできたが、その折々に詠じられた詠史の詩篇には、家学をになって教学修養、かつ社会的に処世する輻輳的な感懷が、詠み得た史的人物を介して浮上してくるように思われる。

漢を中興した光武帝、文章の臣たる司馬相如、代々の史家たる司馬遷、儒臣たる黃憲、叔孫通、公孫弘らは、いずれもみな各時代の各分野で歴史を代表する人物たちである。その史伝を踏まえつつ詠み出される詩篇は、その個々人の事績を巧みに織り込みつつ、道真自身の感懷を投射もして詠まれるから、単なる詠史とも違つて内容的にも興味深いものを内包している。

その折々の詠作は、道真のライフステージに応じた感懷を強く反映するようにも思われる。ただ、竟宴の席にあつて詠み得た人物は、その詩宴で自ら引き得たもので、任意に選択し得たものではない。その偶然性の中で詠作された詩篇であるだけに、その人物の史伝を踏まえた感懷は臨機応変にして当意即妙な一面をあわせもつ。史書類を講書し、あるいは講読し得た学問的成果の自己表出でもあるだけに、往時の学問と詩宴のありようを知る上でも妙味ある一連の作品であり、詠出された胸懷は史伝に重ねて深長な意味をもつものであると考える。

註

- (1) 山本登朗「菅原道真と鄭玄―『講書之後、戯に諸進士に寄す』の作をめぐって―」(『菅原道真論集』所載、平成十五年二月、勉誠出版刊)は、「瑩瑩」の語に関して、「五『後漢書』『鄭玄伝』と鄭玄の訓戒』において「ここでは兄弟のいない一人っ子の孤独な状態の意味で用いられていることが明白である。これによって、道真の詩の『瑩瑩』の語意も、はじめて確定される。」と指摘する。「鄭玄伝」にある「瑩瑩」の語は「瑩瑩」に通じる。「瑩・瑩」は、「孤惸」の「惸」に通じる。
- (2) 後藤昭雄「菅原道真の家系をめぐっての断章(一)」(『平安朝文人志』所載、一九九三年十一月、吉川弘文館刊)において、道真が自身を鄭玄の一子である鄭益恩に擬えていることに着眼し、道真が三男で、兄二人は夭折したとの通説を否定している。
- (3) 文章生となっていた連聡という弟があり、夭折していたともいう。この人物は、そもそも道真が書いた『菅家文章』巻七「祭文」の「祭連聡靈文」に認められるもので、『日本古典文学大系』の注釈において川口久雄は「連聡は誰であるか明らかでない。本文の家君は父是善を指すところからみると、道真の弟であるかもしれない。肉身を哀悼する悲痛の感情をよく抑制して、短篇ながら格調の高い祭文である。」等々と注していた。これに対して、後藤昭雄は註(2)所掲の論文において、「川口氏自身の考え(筆者注:『日本古典文学大系』本における注釈)が揺れてはいるが、弟連聡説が提出されている」というとともに、「この説は認められるのか。結論からいえば、認めがたいものである。」と指摘する。後藤論文は『三代実録』元慶元年十二月二十七日の条や『類聚符宣抄』巻九の「文章生試」にも見出される「連胤」なる人物であったことを推論している。
- (4) この頷聯のあとには、「文章博士非材不居。吏部侍郎有能惟任。自余祖父降及余身、三代相承、兩官無失。故有謝詞。」との注記が付される。
- (5) 註(1)所掲の山本論文の「六 後半の展開」に、「鄭玄の、あまりにも正当な我が子への戒めを、自分たちに向けられたもののように意識しながら、なすところもなく顔を赤らめる進士たち。その姿を、作者道真は描写する。『諸進士』たちの恥じらいは彼等の誠実のあかしであり、また、彼等が鄭玄の訓戒から受けた、深い感動のあかしでもあったように思われる。」と指摘する。
- (6) 倉林正次『饗宴の研究(文学編)』(昭和四十四年一月、桜楓社刊)の「文学展開の基盤としての饗宴」「四 詩宴」「2 詩宴の本義」に、「竟宴は博士が種々の経史を進講し、その終わった時、または勅撰集の完成した折など様々な場合に、開催された祝いの宴のことである。」といい、その模様を具体例から紹介している。
- (7) 『史記』「司馬相如列伝」の注に「索隱案、秦密云『文翁遣相如受七經。』と見える。
- (8) 『文選』には「子虚賦」(巻七「畋獵上」)と「上林賦」(巻八「畋獵中」)の二篇に分けて所載される。
- (9) 揚雄に「長楊賦」(『文選』巻十「畋獵下」)の作がある。
- (10) 『史記索隱』に、「張揖云『喻天子。』向秀云『聖人在位、謂之大入。』」と注される。『漢書』「司馬相如伝」にも、「(顔師古曰『大人、以論天子也。中州、中國也。』)」との注がある。
- (11) 「題駅樓壁(駅樓の壁に題す)」(243)の題下に、「州に帰るの次、播州明石駅に到る。此れ自り以下八十首、京自り更めて州に向へるときに作る」とある。
- (12) 「書懷寄文才子(懷ひを書いて文才子に寄す)」(244)に、「聞き得たり同門の博士の亡りしことを」と詠ぜられる。菅家廊下の出身者だけにその驚きは小さくはない。「我を送りて帰る時 心半ばは死にたり」と詠じている。

(13) 司馬相如と消渴疾等をめぐる中国詩文に関しては、拙稿「相如の渴き」(『節令』第八期、一九八八年九月、節令社刊。のち『流謫の花―中国の文学と生活―』所収、二〇〇三年十一月、研文出版刊)に論究したことがあるので参照されたい。

(14) 『晋書』「王徽之伝」。

(15) 『地道志』に、「梁孝王東苑方三百里、即兔園也。多植竹、中有修竹園。」という。『史記』の「梁孝王世家」には、「孝王、竇太后少子也。愛之、賞賜不可勝道。於是孝王築東苑、方三百余里。」とあり、「竹園」の語は、天子の子孫をも意味する。『史記正義』は、『括地志』に「兔園在宋州宋城東南十里」、葛洪『西京雜記』に「梁孝王苑中、(略)諸宮觀相連、奇果佳樹、瑰禽異獸、靡不畢備。俗人言、梁孝王竹園也。」と見えることを注する。枚乗に

「梁王兔園賦」があり、「修竹 檀欒 池水を夾む」の句がある。袁宏「三国名臣序贊」に詠まれた「競收杞梓、爭采松竹。」の句に対する注に、「松竹、貞堅也。並比於賢人。」とある。

(17) 「孤」については、高兵兵「菅原道真詩に見られる「孤叢」という表現をめぐって」(註(一))所掲の『菅原道真論集』所載)に考察がある。

(18) 『田氏家集』巻上に「菅著作、漢書を講ず。門人会して礼を成す。各史を詠ず」とあるのも、この貞観十三年の竟宴での詠作と考察えられる。

(19) 「講書之後、戲寄諸進士(講書後、戯れに諸進士に寄す)」(82)の領聯のあとには、「文章博士 材に非ざるは居らず。吏部侍郎は能有らば惟れ任ず。余が祖父自り降りて余が身に及ぶまで、三代相承けて、両官失へりしこと無し。故に謝詞有り。(文章博士非材不居。吏部侍郎有能惟任。自余祖父降及余身、三代相承、両官無失。故有謝詞。)」との注記がある。

(20) 以上は、紀長谷雄の「後漢書竟宴、各詠史、得龐公」の詩序(『本

朝文粹』巻九)に依るところである。また、『田氏家集』には、この竟宴で島田忠臣が「蔡邕」を七律で詠じていたことも知られる。

(21) 出石誠彦『支那神話伝説の研究』(一九四三年十一月、中央公論社刊。一九七三年十月、再刊)に、「上代支那の異常出生説話について」「支那の帝王説話に対する一考察」という皇帝の異常出生説話についての論考がある。

(22) 長文に渡るので、原文のみ引用しておく。

「若夫詘中扶一、天度之起可知。記事範群、日官之用爰立。故堯舜盛矣、尚書者降平之典。周道衰焉、春秋者撥亂之法。司馬遷之修史記、君拳無遺。班孟堅之就漢書、国経終建。逮于洛陽帝里、劉嬰暫扼宮城。建武王春、更始纔偷甲子。遂撫運於堯胤、垂德於火方。觀我風雲、安我社稷者、斯乃光武中興之主也。雖則顯宗祇承、使後之言事者、爭先永平之政、然而孝安屬當、令天之厭德者、遂至王度之杌。嗟虜、四百之年、圖書絕筆於孝獻。桓靈之弊、礼樂墜文於山陽。諸葛亮所謂親小人、遠賢士、是所以後漢傾頽者也。於是、順陽范蔚宗、修紀伝而繫日月、巨唐太子賢、通注解以振膏肓。南陽故事、雖百代而可知。東觀群言、成一時之茂典。易日、觀乎人文、以化成天下者、文之謂哉。嚴君知斯文之直筆、味斯文之良吏、遂引諸生、校授芸閣。蓋仲尼閑居、曾子侍坐。思道之事、自古存。觀其人之吐白鳳者、通引籍以先來、世之踏青雲者、待撞鐘而競至。肩昇汗簡、手執韋編。或不覺暴雨之漂流、或不知坑岸之顛墜、豈唯士安高尚、時人号為書淫。元凱多才、独自稱有伝癖而已。属至貞觀六年甲申歲、八月十五日、訓説雲披、童蒙霧散。三冬用足、百篇功成。知籙金之仮珍、感琢玉之真器。稽古之力、不可較量。於是赤帝之史、倚席於白帝秋。三千之徒、式宴于三五之日。嚴涼景氣、方醉上界之煙霞。滿月光暉、咸陳中庭之玉帛。數盃快飲、一曲高吟。不可必趁瑤池。不可必臨梓沢。遊宴之

(23) 『世説新語』「德行篇」第二話に引く『典略』に、「時論者咸云、「顔子復生」。(時に論ずる者咸云ふ、「顔子 復た生ず」と。)」と見えてゐるのに依る。また、『後漢書』にいう「叔度汪、汪若千頃、陂」に關しては、唐の李瀚の『蒙求』の標題には「黃憲万頃」に作られてゐることが知られる。この「千」を「万」に作る異同は、おそらく『蒙求』が劉宋の劉義慶の『世説新語』「德行篇」の記述に依つて、その「万頃」に従つたことに起因するものと考えられる。

(24) 元慶八年には、道真はまた藤原基経のもとで「孝経」を講じ終わり、「相国東廊、講孝経畢。各分一句、得忠順弗失而事其上(相国の東廊にて、孝経を講じ畢る。各おの一句を分ち、「忠順失はずして其の上に仕ふ」を得たり)」(146)の詠作があることを付記する。

Sugawara Michizane's Poems composed at a Kyoen Banquet

HORI Makoto

Born into a scholarly family, Sugawara Michizane was determined to fulfill his mission to succeed to his forebears' learning and to the scholastic mantle of his clan. Moreover, he was living in an environment where people constantly appraised his ability and worth, a situation which may be best described as his fate. One can acquire some idea of his thoughts and feelings by reading the various poems that he composed on occasion, especially ones concerning lectures on Chinese classics and those concerning the composition of Chinese prose and verse, which depict Michizane's thoughts and feelings with particular clarity. In the present discussion I attempt to shed some light on the thoughts and feelings of Michizane as a bearer of family tradition by focusing on the poems composed at a *kyoen* banquet (a banquet held when a lecture on a book is finished or when a book has been compiled) and on the historical figures described therein.

Michizane's historical poems composed at *kyoen* banquets portray figures that appear in history books discussed in lectures and express his thoughts and feelings that reflect the stages of his life at which they were composed. Liu Xiu, who revived Han, Sima Xiangru, the famous writer in the service of Wu-di of Han, Sima Qian, from a family that produced generations of historians, and Confucian scholars in the service of the emperor such as Huang Xian, Shusun Tong and Gongsun Hong were all eminent figures from their respective fields and from their respective periods in history. Not only were the poems based on their bibliographies, the merits of these figures skillfully woven into them, but they also reflected Michizane's thoughts and feelings, an aspect absent in an ordinary historical poem. As the poems were composed following a lecture, they provide an interesting clue not only to the poetic genius of Michizane himself but also to the scholarship and the tradition of poetry composing at banquets.